

## [058] 史淵表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/2335133>

---

出版情報 : 史淵. 58, 1953-09-01. Faculty of Literature, Kyushu University  
バージョン :  
権利関係 :

# 彙報

## 九州史學會春季學術大會

昭和廿八年度九州史學會春季學術大會は西日本史學會と共同主催を以つて六月六日・七日の兩日に亘り九大文學部に於て開催された。第一日は西日本史學會各支部代表の研究發表、第二日午前は日・東・西各部會別研究發表、午後は公開講演が行われた。公開講演並びに各部會研究發表題目は次の通りである。

### 公開講演

○日本中世の女性の地位 福尾 猛市 郎  
○中世都市の市民組織について 今 來 陸 郎

### 各部會別研究發表題目及び要旨

#### 日本史部會

筑紫軍團考

波多野 曉 二

太宰府管内における浪人の發生

片山直義

浪人の意義は時代によつて相違があり、その發生の事情も多方面からの考察を必要とするのであるが、ここでは主として退職官吏の浮浪化を考察する。奈良時代の實情については明瞭でないが、平安初期にはこの問題が表面化してきて地方行政上の禍となつてきた。これを代表する者が豊後前介中井王であり、太宰府は

彼等の禁壓につとめ、肥前國司笠宗雄、筑後國司都御西等はこの政策の徹底に努力したのであるが、その結果は却つて浪人による筑後國司殺害事件の發生をみるに至つた。併しこれは單なる偶發現象ではなくして、黨的活動を始めた浪人が次第に武力をもつて律令政治の運営に一大障害を興えるようになってきたその現實の一面である。九州における武士團の抬頭と、太宰府管内における前司浪人との關係について一つの考察を試みたい。

### 神佛習合の一考察

田村 圓 澄

神宮寺の建立は、すでに八世紀の前半において見られるが、しかし神の爲めの建堂や讀經が盛んに行われるようになるのは、九世紀になつてからのことである。他方、崇道天皇や他戸親王などの怨靈による「祟り」や「物の怪」が顯著になるのも、九世紀に入つてからのことであつた。このような怨靈を慰めるためにとられた主な方法は、寺を建てたり、經を讀んだりすることであるが、神佛習合を促す理由の一つは、ここに見出せるであらう。最澄が唱導した佛教による鎮護國家の具体的條件として、政治的怨靈の離苦得樂が擧げられて居り、また最澄滅後における急激な天臺の密教化も、「祟り」や「物の性」の主体である神々をして、業道の苦患から脱せしめるといふ切實な要求に應ずるものであつた。

### 大友氏の豊後入國

藤井 繁 三

豊後に於ける大友氏の支配の根幹が、一旅惣領制と在地武士團

の統制にあつた事は既に指摘されている如くである。従つて又同時にその統制の不備は、支配の弱体を齎したのであり、こゝでは島津氏の例を参照しつゝ、後世の大友氏の勢力の脆弱さの一面を在地武士團の征服と隷屬の不完全さに求めてゐる。さうしてこの大友氏と在地武士團との相剋は、その入部に當つて、既に先づ、最も顯著に現れたのであり、この觀點から、豊後在地土豪—大神・清原・日田・都甲等の諸氏の大友氏入國以前の事情と、入國に際しての向背の動靜、即ち大友氏の豊後入國を具体的に明かにする事に努めた。

僕はこゝで、新しい説を示さうとしたのも、結論を出さうとしたのもなく、この發表全体が、今後僕が續ける大友氏史四百年の序説をなすものである。

評定衆について

杉谷昭

源氏將軍家の後をうけて、執權政治によつて幕府を維持したる北條氏は、評定衆を通して幕政を掌握した。頼朝没後、御家人統制について、或は武家階層の權益擁護について腐心した北條氏一門が、先づ執權職を確立し、次いで評定衆を設置し、更には御成敗式目を完成した。この北條政権の歩みの中、嘉祿元年の評定衆設置に焦點をおくと、衆議制(評議、群議)の重視がはやくから窺はれる。源氏將軍家衰退後における御家人層の動搖を統制し、自らの勢力を擴大しつつも、幕府執政の權威を、衆議に求め、更に衆議を起請を以て神聖化、絶對化した北條政権と、その背後にある御家人社會について考へると興味深い。法源史料による法制

史上の評定衆を、其他の通記類によつて政治史的、社會史的な視角からも併せ考へると十三世紀初頭の北條政権をめぐる鎌倉幕府の性格が明かになる。

聖光の思想

深溝徳味

法然による専修念佛の成立がもつ歴史的意義については、今日種々の見解があるが、私見は次の點を重視したい。それは法然の宗教が、古代宗教とのたゞかゝの過程に於て

1 徹底せる庶民の立場に立ち

2 念佛を最高の善となすことによつて、家父長的支配と癒着せる世善を止揚し以て古代の貴族及び中世武士の支配秩序に對する矛盾者としての自己の姿を明確にしたことである。この法然の立場は、今日淨土宗教團に於て師の忠實なる遵奉者とされる鎮西教團の創始者たる聖光によつてそのまゝ繼承されたであらうか。否である。では都市に成立した専修念佛が、聖光によつて始めて鎮西の農村に移植されたとき、どのような變質は一体どのような歴史的事情に據るものであるうか。

對馬藩奴婢制の源流

安河内博

對馬藩に於ける奴婢制成立の由來、源流を辿るならば、室町時代に於ける對馬と朝鮮との密接なる關係等より考察して、先ず高麗・李氏朝鮮に見られる奴婢賜給の制度並びに奴刑の影響によるものでめらうと考へるのであるが、茲には對馬藩の奴婢制と古代

國家に於ける犯罪奴隸との比較検討により、これが源流に關する一討論を提示した。

### 町人請負新田について

—大阪川口新田を通して—

池田史郎

近世封建社會の成立と共に經濟的に抬頭して來た町人階級は鎖國による國際市場からの懸絶と土農工商の身分制の桎梏によつて農民を勞働者として使うことが出来なかつたがために彼等の蓄積した商業資本を工業に投資することによつて産業資本に切り換へることが出来なかつた。このことは大名相手の金融資本の蓄積の不振と相まつて元祿頃より町人請負新田の成立を促した。一般に新田は本田とはその年貢、また構成に於て全く違つていゝといふ説もあるが必ずしもそうであるとは考えられない。新田の年貢が本田より軽いといふのは新田開發獎勵と開發當初の不作などのために外ならない。従つて收穫の増加と共に新田の年貢も増加して行くと考えられる。

また新田の構成は庄屋、年寄等の村役人と本百姓、小作人よりなる本田と異なり、町人地主の代理者たる新田支配人と小作人よりなつてゐることは留意すべきである。併し新田支配人の仕事は小作米の徵集ばかりでなく武士の發する法令の傳達や年貢米の取立をも行い庄屋の仕事も行い純粹な農企業家とは思われない。享保頃の小作証文を見ると五人組が新田にも作られていて新田の經營がその構成よりみて本田と全く違つていたとは考えられない。このことは享保以後の代官の新田小作人への觸書をもて質素儉

約の獎勵や田畑永代賣買、徒黨、逃散、邪宗門の禁など武士が一般本田の農民に對してとつた農奴的政策と殆んど變つた所がない點と併せ考えべきである。尤も多くの耕作農民を必要とするこの大規模な海表新田にあつてはその小作の種類に永小作の外に出作（入作）年期作があつてその小作証文には契約的な點も多々見受けられるが、尙深く觀察すれば封建的色彩が濃厚にあつて小作人の人格がどの程度認められていたかを疑わしむるものがある。要するに封建制下に發生した町人請負新田は單に資本主義の方面のみでなく封建的方面をも併せ考察すべきであると思ふ。

### 淨土教思想と武士—領主層

山本多門

「鎌倉時代において武士—領主層が淨土教思想を受容していつたことは周知のことであるが、しかしながら一方に於いて鎌倉幕府、さらには「領家・地頭・名主」までが淨土教斷崖の側に位置していることも事實である。何故にこのような相背する事實が並存しているか、その歴史的理由を考察することが此の發表題目の意圖である。勿論その全貌を明らかにし得ないのであるが、その一因として以下のような事情を考へ度い。即ち彼ら武士—領主層の、淨土教受容の態度換言するならば彼らの示している入信の契機に見られる呪術的な性格である。それは此の時代に於ける武士—領主層のもつ在地性の族的團結が一面に於いて有せざるを得ない性格と考へられるのであるが、凡そ史的現象に附隨する呪術性の果す役割を考へながら冒頭に述べたような兩者の關係の一端を考察する。

東洋史部會

南宋總領所の所隸機關に就て

山内正博

唐折衝府と地方行政機關との關係について

菊池英夫

地方行政單位たる州縣が「界」と稱する管域を持ち、所管戸口に於ても大小各様の規模の差を有つたに對し、規定兵數の絕對確保の爲あくまで人戸居住の實狀に即して設けられた兵府の管域たる「地圖」が如何なる關係にあり、機關としての兵府・州縣は如何に所管事務の調節を行つたかを、地域的に検討して府兵制の具體的運用を探る手掛としたい。

法滅盡經について

撫尾正信

中國に於ける末法思想成立の地盤として澆末思想を説く經典に注意しているが、諸經錄には法滅盡或は法沒盡と名づける經典が多數見えてゐる。このうち吳支謙譯といわれる法滅盡經(法沒盡空寂菩薩)と東晉祇多蜜譯といわれる法沒盡經は勿論のこと、西晉竺法護譯といわれる法沒盡經(所問經)同じく小法沒盡經などは初から存在しなかつたものの如くである。これに對して隋代に存在したのはいづれも疑偽經典の空寂菩薩所問經(法滅盡經)、法滅盡經(大正藏經卷十二、佛)、佛說法滅盡經、小般泥洹經(法滅盡經)であつた。このうち空寂菩薩所問經は時代が少し上るようであるが、

他の三本は南北朝時代の製作と思われる。このことは南北朝時代にいかに法滅の憂慮が社會に瀰漫してゐたかを思わせる。尙現存の佛說小法滅盡經(大正藏經卷八十五)は開元釋教錄に見える疑惑の小法滅盡經ではなくして、現存佛說法滅盡經の一種の異本であると考えらる。

清朝史の一詢

—南山集疑獄—

水原重明

大宛フルガナ説に對する疑問

筒井滿志

漢武帝が汗血馬取得のため征討した大宛國は魏の破洛那、隋唐の拔汗那と同じくフルガナの地方であるとするのが定説であるけれども疑問の點が多い、葱嶺の西なるバダクシャン地方を指すのではないかという推測を呈出する。唐書に寧遠國者本拔汗那、或曰鐵汗、元魏時謂破洛那……(顯慶)三年以渴塞城爲休循州都督とあるので破洛那=鐵汗=フルガナと考えられたのであるが、唐書の記載は極めて信を措きがたく、先づ、拔汗那(フルガナ)に漢時の休循國があつたと錯覺している點その東曹國(蘇對沙那國 Sutrausa)石國(拓支 Tashkent)についても大宛の境域中に比定している點から考えて唐代人の錯誤の跡は蔽い得ない現書に沿那國故大宛國也、那貴山城、在疏勒西北、去代万四千四百五十里、太和三年遣使獻汗血馬とある洛那は破洛那の略であるがこれとフルガナと同一視する點が問題である、北史隋書には別に鐵汗國都葱嶺之西五百里、東去彌勒千里、西去蘇對沙那國五百里と

あるのは正しくフェルガナであるが必しも破洛那、饒汗同一視しうる資料ではない。破洛那と同一視しうべきものは寧ろ弗敵沙國で、弗敵沙國故陸頓領侯、都薄莽、在鉗教西、去代一万三千六百六十里、居山谷間とある(魏書北史)のはバダクシヤンを指すといわれているが、鉗教(貴霜領侯の故地)とは相去る百里の至近で殆ど同一地と見られる普通ワカン地方(クシヤン)はバダクシヤンにいれられてゐる、破洛那は破洛邪の誤りと見なすればバダクシヤ(バラクシヤ)の音をうつしたもので弗敵沙と同一地と見なしうる。魏書に同一地を二つにしてあげるのは疑問とすべきであるが魏書の資料が二源を有するためであらう。而してラクーペリーが指適する如く大宛人はヤヴナ(イオニア)人であるとすればバクトリア系のギリシヤ人の國でサカ族のため侵略されてこの山間の地を保つていたのではあるまいか、大宛の都貴山城はコージエントヤカジヤン(渴塞城)に之を求むべきでなく後世の貴霜と同一なのではあるまいか、マルコポーロによればバダクシヤンの名馬はアレキサンダー大王のブケフアルスの遺種ともいわれるがこれこそ傳説的の千里を走る大宛の汗血馬ではなからうか。

河原由郎

弓箭手とは、宋代、陝西河東等の西北邊境に於いて、一種の屯田組織を以て構成した郷兵(民兵)とも云うべきである。今日、ここで問題としたいことは、給付田土に關し

- (1) 給付對象の田土
- (2) 給付の方法次第

(3) 給付と勞役  
右三項について論じたい。

南朝州鎮の一考察

越智重明

府州兩官僚機構は、東晉末より南朝にかけ、一長官の下に(軍事的行政面の相對的優越性を表面に出しつつ)統合的傾向を強め茲に州鎮官僚機構を形成するに至つたが、かくて生じた機構には、國家意志を執行すべき官僚機構そのものとしての強力化合理化が見られると共に、獨立の倫理的觀念で裝われた政治的勢力としての機構の變質が漸く現われ、更にそこには紀對的なものとしての長官權威の生成が考えられる事となるのであるが、「州鎮官僚機構」そのものの考察を通じ、南朝州鎮の反亂乃至その成功過程を見て行く事とする。

趙郡の李氏について

矢野主税

西洋史部會

イギリスに於ける一五九六・七年の

食糧飢饉について

加藤知弘

ピアードの經濟的解釋論

—特にその經濟力論について—

福本保信

C・A・ピアードの歴史理論は、客觀的眞理を否定する觀念哲學、歴史の經濟面を重視する經濟的解釋論、および一種の理念で

ある思索の規格を中核とするものであろう。この三つが彼において統一されている。彼が唯物論歴史學者と屢々誤解されるのは、この三つを切り離して考えることに歸因する。彼はマルクス主義者ではない。寧ろ強いアンティマルクス主義者である。彼の史観は唯物史觀と全く別個のものである。此のことは彼の經濟力論に明らかに表出されている。彼の經濟的解釋はマヂソンのフエデラリスト第十號を出発點とし、それに青年時代に受けた社會正義が加味されている。しかも時代と共に變化してゆく。彼が二九年に始る大恐慌に面した時發表した「計畫經濟」から彼の經濟力論を考究しあわせて彼の史論との關係について述べたい。

一八七八年二月十九日ピスマルク議會

演説について

田中友次郎

古代末期におけるキリスト

教徒の教養について

長友榮三郎

中世イギリス農村工業

藤原浩

衆知の如く近代的工業は、ヨーロッパ諸國に於て、農村工業を基盤として展開した。イギリスのそれも十五世紀來から、就中十六世紀から、工業の都市退去によつて農村地域に繁榮した農村工業を背景に持ちつつ發展した。しかしイギリス近代の初期に中心的な地位を占める毛織物工業の都市退去は右に擧げた初期に始めて現れたものではない。十四世紀後半、更にさかのぼつて十三世

紀に、この都市退去は始まつたのである。それではその原因は何であつたが、そればしばしばいわれる如くギルド的規制を免れるためであつたが、あるいは自然的立地條件にもとづくものであつたか、あるいはまた領主制の強度如何に關係があつたであらうか。これらの点に若干の考察をみたい。

南北戦争直前のアメリカ南部における

「プア・ホワイト」の數について

三浦道

アメリカ合衆國の南部に「プア・ホワイト」(Poor White)と呼ばれる貧乏な、無知な、無道徳な、動物的な生活を送る人々が存在することは、最近邦譯された小説『ダベコ・ロード』などによつても知られている。この「プア・ホワイト」という言葉は、その幾多の別名とともに南北戦争前にも存在して、Hinton R. Helperその他、當時の人々の中には、南北戦争直前において、「プア・ホワイト」の數が非常に多數であり、かれらの南北戦争において果すべき役割が甚だ大きいことを、すでに述べていた。しかしながら現代のアメリカの史家たちの多くは、この見解をとらず、當時(南北戦争直前)の種々の情勢から「プア・ホワイト」は過大評價されたのであつて、實際はその數はずつと少數であるという Den Hollander 氏の説を受け入れている。しかし私は同氏の説を平直に受け入れることはできない。「プア・ホワイト」の概念の把握の仕方が問題だと思ふからである。

「小屋住農」について

松垣裕

考古民俗部會

宮崎地方における網漁と石錘について

田 中 兼 行

遺物としての石錘については、その用途が漁撈用の錘り石として多く使用されたことは最早疑えないところであらう。然しこの石錘が漁撈用として如何に使用されたか、という點に關しては今度明確にされる迄に至らない。この研究はその點についての解答を試みる爲現行漁獲の習俗調査と考古遺物石錘とを關連させて推考し結論を見出そうとしたものである。

宮崎地方においては錘を使用している漁網四十一種、その他の漁法で錘を使用しているもの三十六種合計七十七種がある。又考古遺物としての石錘四八個について調査をすゝめその現行使用の錘と遺物石錘とについて關連的考察を施すことによつて五方面の網漁を規定しその他三方面の漁具として、使用されたことを推定したのである。考古學と民俗學の關係的考察の成果によるものといえよう。

小倉市日明爲朝山横穴に就いて

田 頭 喬

小倉市の西部を占める低い丘陵群の中腹に可成りの數の横穴が存在する。その内で最東の丘陵即ち俗に愛安山又は鳥朝山と呼ばれるものに現在六個の横穴が開口している。同地點には既に消滅

したものと相當數あつたと聞く。筆者は今春その開口せるもの六個の内五個を實測したが、幸にも殘存した數個の土器より觀て、時代的には奈良時代頃のものらしく、構造的には、玄室天井部の所謂「寄棟造」の形を浮き彫にせるものや、「切妻造」のそれを表せるもの等を有し、古代建築史の資料としても極めて面白く感じた。この實況を報告して諸賢の御高見を乞ひ度い。

下城式土器とその共存關係

佐 藤 曉

大分縣佐伯市下城遺跡を模式とする所謂下城式土器は東九州中部地區においては遠賀川末——須玖式乃至唐古第一——二様式、山口縣大井遺跡より出土する一群の土器と類似形式の土器群と共存するが、大分縣速見郡藤原村大津遺跡においては唐古第一様式と遠賀川式——須玖式の移行期の土器と共存し、又同村下城遺跡においては唐古第二様式長頭壺型土器と須玖式と共存し、大分市花園遺跡下層においては須玖式末の形式の土器と東九州地方において所謂戸次式と呼稱される櫛目式土器の祖元とも考へらるべき土器と共存するが、この共存關係において、下城式土器が彌生式中期を中心に展開すると共に後期の櫛目式土器の發生及び東九州における櫛目式文化の傳播の時期についての重要な鍵點を見出させるものであるのみならず、東九州地方の彌生式土器の形式分類において特に中期の諸土器形式中一つの土器セットとして特異な文化圏を構成すると思われる。



大分縣(豊前豊後)に於ける  
漢式鏡發見の古墳について

加川 光 夫

從來九州地方に於て所謂畿内前期古墳に比定されるものに就いて、あまり其の例を聞かないが、東九州に一、二興味ある前期古墳が注目されるので、この点を中心に検討することにした。古墳の編年の研究に漢式鏡を中心にするとは論を俟たないところであるが、東九州に於て劉氏作の畫像鏡が發見され、後漢の作品が注目されたのである。更に最近に於ては染銅作の細線式獸帶鏡の發見も注意された。この二つの古鏡の中畫像鏡を出土した鑑堂古墳は且て南善吉氏によつて報告された如く圓形墳の上部に割石積した堅穴式石櫛を有する主體部を形成して居り、細部に亘つては不明であるが一應畿内前期の古墳と推定することが出來よう。更に獸帶鏡數面を出土せる豊前の石塚山古墳に關連するものに同國宇佐郡赤塚古墳や豊後國狐塚古墳等墳頂附近に箱式石棺又は長大なる堅穴式石棺等の發見により、一應畿内前期の古墳の分布が東九州地方に及ぶことが知られる。尙この前期古墳に比定されるに後續の畿内盛期古墳の分布は豊後國臼塚古墳發見の位至三公双龍鏡出土のものにより代表される。この盛期の古墳を特徴づけるものは古墳上方に位置する舟型式石棺で其の發見例は可成りの數に達している。以上畿内前期及び盛期の古墳に比定される古墳の中漢式鏡出土の二三を中心に検討することにする。

史學懇話會

第五十七回 六月九日(火)

今回は、折から出張講議で御來學中の本會顧問・本學名譽教授長壽吉先生の歡迎會として大會議室に於いて開催、先生の「第一次大戰當時に於ける滯獨體驗談」と題する極めて興味深い御講演を二時間に亘り拜聽させて頂いた。御退官後既に十年、先生が今もお元氣に學界のために御活躍下さる事は我々一同の深いよろこびであり、こゝに先生の御健康と御多幸を衷心より御祈りする次第である。

國史學科の動向

第十二回國史學研究會 六月四日(木)

大友能直の出生に就いて

藤井賢三

豊後大友氏の初代能直の出生、特にその實父に關しては、系圖を始として吾妻鏡、明月記等の記事に多くの異同がある。その中、源賴朝落胤説が最も廣く流布し、後世の著作、編纂物の殆ども之に従つてゐる。併し又、落胤説を疑問視する人はあつても、その理由のないまま之を否定し得ず、まして實父を積極的に明かにしてはおられない。こうして能直の賴朝落胤説は疑われ乍らも確証のない儘に、やむなく受け入れられてゐるというのが現状である。

僕は從來の能直の出生に關する諸説を分類し、その一々に就いて反駁し、時にその牙城たる落胤説を排する事に依つて實父を明かにしようとした。こうして得た結論は、能直の實父は近藤能成なりとするものであるが、未だ確證を得難い。今後新史料の發見される事があればこの結論は裏付けられ得るであらう。

第十三回國史學研究會 六月十八日(木)

發生期に於ける松浦黨

瀨野精一郎

中世に於ける松浦黨の變質過程を明にするため、一般に松浦祖源久が攝津渡邊莊から肥前宇野御厨の檢校として下松浦志佐郡今福に downward して來たと云はれる後三條天皇の延久元年(1068)から源平交替期をたくみに切り抜け鎌倉御家人としての地位を確保したと思はれる正治元年(1131)までの間の松浦黨を發生期の松浦黨としてとらへ、その間の松浦黨の政治的動向及び黨的性格を明にしようとしたものである。即ち政治的行動は主體性のない時局便乗、乃至事大主義によるものであり、しかもこれは後世松浦黨の性格として一貫して居り、この事大主義、無節操が波瀾の多い中世の政治社會をくゞつて近世大名として生き残つた一原因と思ふ。又松浦黨はすでにこの當時黨組織を結んでいたらしく、この發生期の松浦黨に於ては黨を構成した一族中に上下關係が認められない事は黨の性格を考へる上に同時代の武士團の性格と比較して注目に値するものである。

東洋史學科の動向

新刊

東洋史學 第八輯 昭和廿八年八月刊

目次

禾一 唐宋用語解之六一

日野開三郎

宋代・特に治平・熙寧年間に於ける、

唐襄二州の水利田の開發について

河原由郎

唐代府兵の課役免除についての疑問 松永雅生  
五代・後唐の回圖錢に就いて  
宋史食貨志譯註 日野開三郎

西洋史學科の動向

第三十回西洋史研究會 五月廿二日

Historische Zeitschrift 174. Bd. 所載の

ニ「バー」信仰と歴史」の紹介

前間良爾

長教授歡迎會

六月九日史學懇話會終了後、工學部地下食堂に於いて開催。晝食を共にしながら先生に種々質問をし、一々丁寧な御教示を頂、又先生から豊富な研究上の御體験に基くお話等があり、終始なごやかな雰圍氣の中に會を終つた。

第三十一回西洋史研究會(六月十三日)

Rev. Histor. CCIX. I. 所載の「ロベール・

フイリイポー」ロシヤに於ける饑饉の増

大と食糧立法」の紹介

荻野雅弘

第三十二回西洋史研究會(六月廿日)

英國 Fustian 工業

古城宏一

集團的必要の前に於ける集團的經驗が生んだ産業革命はあらゆる史的意義を含んで居る。就中、英國のそれは木綿工業を中核としつゝ、典型的發展を遂げたが、ランカシヤ集中の現象と、それ

の毛織物工業凌駕の理由はどこに求められるか。私はその解明を、先行産業たる Fustian 工業に求める。而も Chapman 的見解を排して、ランカシャの經濟基盤の優位性の上に介在し活躍した「商人」達の問屋制の前貨の支配形態の過程を明かにする事に依つて求められると思う。

受贈交換雜誌目錄

- 横濱大學論叢 第四卷第五號 横濱市立大學學術研究会
- 史 林 第三五卷第四號 京都大學史學研究会
- 史 林 第三六卷第一號 同
- 東洋史研究 第十二卷第三號 京都大學東洋史研究会
- 國史學 第六十號 國學院大學國史學會
- 地學雜誌 第六二卷第一號 東京地學協會
- 文 化 第十七卷第二號 東北大學文學會
- 北陸史學 創刊號 石川史學會
- 立命館文學 第九六號 立命館大學人文科學研究所
- 經濟理論 第十三號 和歌山大學經濟學會
- 經營研究 第九號 大阪市立大學經營研究会
- 經濟情勢 第二八四號 三菱經濟研究所
- 經濟情勢 第二八五號 同
- 駒澤史學 第二號 駒澤大學史學會
- 歷史評論 第四四號 民主々義科學者協會歷史評論部
- 歷史評論 第四五號 同
- 史學雜誌 第六二編第四號 東京大學史學會

- 史學雜誌 第六二編第五號 同
- 史學雜誌 第六二編第六號 同
- 史學雜誌 第六二編第六號 一橋大學一橋學會
- 東方學報 第二十二冊 京都大學人文科學研究所
- 古 代 學 第二卷第二號 古代學協會
- 考古學雜誌 第三卷第五、六號 日本考古學部
- 天理大學學報 第十輯 天理大學人文學部
- 法學論叢 第五九卷第一號 京都大學法學會
- 愛知大學文學論叢 第五、六輯 愛知大學文學會
- 人文地理 五卷第一號 人文地理學會
- 經濟科學 一卷第一號 名古屋大學經濟學部
- 同 一卷第二號 同
- 同 一卷第三號 同
- 同 一卷第四號 同
- 同 二卷第一號 同
- 同 二卷第二號 同
- 同 第三輯 東北史學會
- 同 第四輯 同
- 同 第五輯 同
- 東洋文化 第十二號 東京大學東洋學會